

空のはたてに

加茂 菖子

(作家)

ただあるはほむらとなりてなさんかな
そのころざし空のはたてに

これは、親しいパイロットの方々によせた私の歌である。大空への憧憬と青春を賭けたかつての私達の気魄は、今も私の胸に燃えている。

幼い日から何故海だの空だのが好きだったのかよくわからないが、すべての生命を包み込むかに思える自然のたくましさと無限の叡智というものに、私は早くから魅せられて来た。少女になって私の心に住む人は、海を制し空に挑む人、と定めてしまったのも当然の成り行きであり、私自身もその世界に生きたいという気持ちに他ならなかった。

しかし、私の夢が叶えられようとした時、私達の青春と戦争がぶつかってしまったのだ。私が巡り逢えた人は、最も海軍の飛行機乗りらしい爽やかな心ばえの人だったが、お互いの愛をあたためるとまもなく、彼は二十七年の生涯を南太平洋の空に殉じて行った。

人生の岐路である青春を戦争の中におい

ただけでなく、戦争の非情さを愛の上にも知った者にとって、敗戦は更に過酷な痛みを刻みつけた。戦争への徒労を欺き、帰らぬ人を惜しむ悲しみはつきることがなかったが、私は私達の青春が泥沼であったとは決して思わなかった。それは、戦争とは関係なく、彼も私も自分達の憧憬の世界に生きていたからだといえよう。

それだけに、日本が日本の空を失い、日本人が日本の空さえ飛べずすぎた時代が、私にも一番辛い時だった。「わが空はわが空ならず秋の空」「鳥は鳥でも我々は鶏である。」という歎きは、翼を失ったパイロットだけのものではなく、日本人にとって、敗者のみじめさを痛感させる虚しさであったと思う。

昭和二十五年の航空庁発足、二十六年の日本航空発足、二十七年の浜松に於ける警察予備隊の操縦訓練開始などを経て、二十八年秋、戦後第一回目の航空記念日を迎え、ここにはじめて日本の空が日本人の手に戻る道が開けた。その後の発展ぶりはまことにめざましい。今、多くの人が当たり前のような顔をして国内はもとより世界の空へ飛び立って行き、日本の航空路線も世界中に広がりつつある。

その民間航空も、最初は単に切符を売っているにすぎなかった。日本人パイロット達は、

搭乗権を獲得する手段のために、まず職種としてパーサーの名目を得ることからはじめ、更に航空ピットの住人となるまでには、アメリカ人パイロットとの間に介在するあらゆる軋轢に耐え、敵味方の確執の消えやらぬ本土での留学により、新しい航空技術を学びとらなければならなかった。語学の苦勞と厳しい訓練テストを乗り越えて、太平洋線初の日本人機長が誕生したのは、昭和三十二年四月のことだった。

民間航空にして然り、自衛隊の航空が、当初に於いていかに微々たる存在であり、またいかにパイロット達が困難な過程を踏んできたは想像にかたくない。しかも、その中で、発足後六年目の三十五年六月、海上自衛隊の航空は、民間航空とも航空自衛隊とも違って、アメリカ海軍から離れ、軍隊の力によって限定支配されない完全独立をなしていたのだ。

かつての海軍のパイロット達が、日本の空の法的独立のために燃やした気魄の激しさは、私の胸にも痛いほど呼応してくる。日本の国土をほしいままに爆撃にさらしたあの悲しみと悔恨は、海軍の飛行機搭乗員にとっても最も深かった筈である。あるいは、その悲しみが彼等を依怙地なまでに闘争させたかも知れないが、もっと切実な気持ちに迫られていたに違いない。彼等は、真実日本の空

を愛しそこに生きてきた者として、次の世代のパイロット達を信じ、日本の空を自分達の手で取り戻しゆずり渡しておきたいというひたすらな願いを通したのだと私は思っている。

しかし、当事者だったある方が「太平洋の空は、その海岸にある海上自衛隊の飛行場とともに日本の海軍に還ってきたが、私の愛する友や部下は還ってこないのだ」と歎かれたが、喜びのかげのいいがたい虚しさとし新しい悲しみは、残された者の心にはあまりにも深い。

翼を得たパイロット達が次々に大空へ戻って行く。私の彼の同期生の方は、P2Vを駆って誰の力もかりずに太平洋を横断したし、太平洋線初の日本人機長になった方も、親しい知人であった。航空自衛隊の素晴らしいうまくパイロットをみることに、日本航空が世界一周線をめぐらし、私自身が北極圏の圧倒されるような大自然の中をヨーロッパへ飛ぶ機会を持ったことにも、人よりは強い情熱と関心を覚えている。そして、戦争を乗り越え、私達の悲願を果たして日本の空をとり戻し、再び世界へ飛翔して下さる方々に、私は心からの感謝を抱き、尚限らない夢を託している。だが、現実はそのことをなし得る方々を、やはり幸せなことと思わずにはいら

れない。いかに、苦難な道に挑むことであろうとも、その闘志と栄光は、生きてあつてこそ本心に輝くものではないだろうか。

私は、今でも好んで飛行場に佇んでみる。飛行場とは空と海、宇宙と大地、この国と異国、現世と幽冥界と、すべての岐点であるようだ。飛行場の風に吹かれながら、そこはかとなないものあわいの中に立って、幾度悲しみにせかれ、虚しさに畏れを抱いたことか。それは孤独と寂寥の深淵を思い知らせるものではあつたが、しかも、一つの安らぎをあたえてくれるのもまた飛行場に続く大空であつたことを、私は不思議にさえ感じたものだ。

思えば、生きてある人を羨みはしても、その栄光はやはり私の最大の願いでもあることは、一つの青春、一つの愛に燃え尽きてしまいたい気持ちと、失われた生命をも生きねばならぬという気持ちとの葛藤にも似ていた。そうした矛盾の中で、私は喜びを喜びとして、悲しみは悲しみとする心を身につけてきたのかもしれない。それもまた、パイロットに憧れ、パイロットの境涯を愛する私の変わらざる心性だったろうか。

そうなのだ。大自然との触れあいの中で、己をいとおしみ、人も物も愛し、この世に生まれたことをつくづく幸福に感ずるのは、パ

イロットのみが知るひそかな誇りであろう。そして、飛行場というところが、すべての無限無限の岐点であること知り、孤独との対決の厳しい理念を持つのも、飛行機乗りの特権であるに違いない。私にとつても、だから、思い出だけが通りすぎ、虚しさだけがさいなむところではなかったのだ。彼達がこの現実生きてあつたあかしをたしかめることができ、私達が残した青春への慕情をよみがえらせ、尚、自らというものをひしひしと感じさせるのは、どこよりも飛行場であつたのだ。

初めて愛を知った時、私達はこう言つたものだ。「大空には無限の可能性がある。あたかも我々の青春のようだ」と。けれど、戦争とは、多くの可能性を孕んだままの自分をかかえて、若者たちがいかなる思いを秘して死んで行つたか、その奥深い思いだけが、戦争の事実を語ってくれるのではないだろうか。彼達が呻吟し、夢み、祈つた、声なき声がかかるのも、飛行場につづく天と地のあわいであると思はれる。そして、その飛行場から、彼達の万感の思いをこめた意志をつぎ、無限の可能性に向かつて、パイロット達はそれぞれの義務に闘志を燃やして日夜飛び立って行く。

戦争はかけがいのものを軽々と奪つたけれど、そうした無惨なまでの力であつたが故

に、友情と愛情の真実を私達は知ってきた筈である。戦いに殉じたものと生き残った者との共通の憧憬と祈念は、大空に於いてこそ最も固く結ばれて行くに違いない。そう信じる
ことが、彼達への鎮魂となり、私達自身の生きて行く態度ではないだろうか。敬愛するパイロットの方々の御健闘を願うとともに、多くのなつかしい人達のみたまが、祖国の空を安らかに飛翔して下さるように祈ってやまない。

大空を生きる栄光かさねつつ

君いつの日までも飛翔したまえ

昭和四十三年九月二十日

(この一文は、昭和四十三年十月発行の、機関紙「予科練」の第五号に掲載された記事です。)